

# フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞の文法化について

渡邊 淳也  
(筑波大学)

フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞 (verbe de déplacement de type *itif* ou *andatif*) の文法化について論ずる。文法化とは、ここでは主に (準) 助動詞化が問題になる。以下に挙げるような諸事例を扱う。

## 1/ 迂言的未来形 (futur périphrastique)

<「行く」型移動動詞+不定法>で未来の事態をあらわす迂言的未来形は、移動動詞が事態の実現にむかう漸進をあらわすことから、発話時点からの連続性においてとらえるような未来の事態を標示する。それに対し、単純未来形は、発話時点から断絶した事態を標示する。

(1) **Maintenant** qu'il a fini ses études, il { **va retourner** / \***retournera** } au Japon. (Franckel 1984 : 67)

(2) **Un jour**, je { ?? **vais t'expliquer** / **t'expliquerai** }. (Leeman-Bouix 2002 : 162)

## 2/ 迂言的過去形 (préérit périphrastique)

カタルーニャ語やガリシア語には、<「行く」型移動動詞+不定法>で過去を指示する用法がある。

(3) [カタルーニャ語] **Ahir vaig dormir** tota la tarda. (Bres et Labeau 2013 : 302)

きのう、わたしは午後ずっと寝ていた。

(4) [ガリシア語] **Onte vou ir** á feira e atopame con Xurxo. (Pérez Bouza 2007 : 831)

きのう、わたしは市場にゆき、シュルショに会った。

Hagège (1993) はこの用法を、迂言的未来形の *moving-ego metaphor* とは反対の *moving-ego metaphor* によるとしているが、誤りである。実際には、物語や歴史叙述の現段階から、つぎなる事態への移行をあらわす用法を母胎とし、そこから<「行く」型移動動詞+不定法>のみが独立した用法である。

## 3/ 異常なふるまい (allure extraordinaire)

Damourette et Pichon (1911-1936 : §.2604) によって命名された用法である。

(5) **Oui**, une voiture toute neuve. Et ce connard **est allé m'emboutir** une aile ! (Larrea 2005 : 351)

この事例にも漸進性がみとめられ、直線的時間によって不可避免的に、後続不定法であらわされる行為へとむかってゆくことを「*aller*+不定法」があらわしている。あたかも、異常とみなされる行動をとる主体が、そうした不可避性につき動かされているかのごとき意味効果が出る。また、「行く」型移動動詞が直示の中心から遠ざかる「遠心性」を基本的性格とすることから、マイナス評価が出てくるものとも考える。先行研究ではこの用法と同一視されていなかったつぎのような例も、その点では同様である。

(6) **Les habitants de Paris sont d'une curiosité qui va jusqu'à l'extravagance.**

(Montesquieu, *Lettres persanes*)

このほか、4/ 特徴づけ (*caractérisation*) をあらわす用法や、5/ 間投詞化などの事例も同様の考えかたで論ずる。

結論として、文法化した事例は、全般的に、「行く」型移動動詞があらわす移動の概念から出発して、「着点の標示」、「不可避性」、「遠心性」などをかぎとしながら、ある種の仮構的移動としてとらえることができる。